

## ニューヨークの中の日本人(その二)

### ——子どもの世界——

佐藤 奈美子



### 新しい家

三人の子ども達をつれてはじめてケネディ空港に降り立ったのは、一九七三年六月のことでした。長女の真由美六歳十か月、長男浩史三歳十一か月、次男貴宏一歳六か月。この日から一九七六年十二月に帰国するまでの三年半を、私達はニューヨークの住人として過ごすこととなったのです。六か月前にすでに赴任して来ていた主人は家を探すのに大変苦労をしました。あはれん坊が三人居ては、日本でもアパート暮

しは気苦労の多いものですが、こちらの人は日本人以上に口うるさいとの事で、まずは高層アパートではだめ。一軒家はお家賃が高い。それで環境や学校、買物の便などをえ合わせて、クウィーンズ区のあるガーデンアパートの一軒を借りることになりました。ガーデンアパートとは、二階建て、或いは三、四階建ての家が横に長く連なっている建物です。近代的なアパートに比べると、建てられた年代も古く、建物自体はあ

まりきれいとは言えませんが、まわりの庭は広々としていて、自然環境には恵まれている所の多かったようです。住んでいる人達も、いたって庶民的でした。六月はニューヨークでも美しい季節でした。新緑が輝き、バラの花香り、高い梢では、早朝から小鳥の声ひびき渡り、広い芝生の間をリスがかけぬける。まるでボロ兵舎のようだと嘆く住人もありましたが、大きな自然に囲まれた、赤レンガのアパートは私も大いに気に入りました。地下室と一

階、二階、どんなにあばれても、階下からつつかれる心配のないこの古い家とまわりの環境を最大限に利用しながら、三人の子ども達も、それぞれの三年半を成長して行く事となったのです。

日本での六月は、まだ新学期の気分も新たな時でしたが、ニューヨークでは、まさに一年の終わらんとしている。丁度日本の三月のような時期でした。新入学で張り切っていた真由美は、ニューヨークで最後の十日間を通い、一年生を終わる事になってしまいました。六月二十一日から始まった夏休みは、九月九日まで。ニューヨークでの第一歩を、私達はまず夏休みから始めた、と言う事になります。

### 夏休み

ニューヨークには夏時間と言うものがあります。日が長くなると一時間時計を早めるのです。毎年大抵六月から始まって十月

まで。オイルショックで明けた、一九七四年には一月六日から始まりました。節電するなら他に方法もあるだろうにと思いがら、真暗なうちから起き出したものです。

こんな訳で、夏休みともなると夜は九時近くまで外が明るいです。その長い一日を子ども達は遊びました。宿題も無く、完全に勉強からは解放されて。

太い枝からは綱ぶらんこやタイヤがぶら下がり、ガレージの屋根の上では鬼ごっこ。隣家の物置小屋にまでとび移ってはどなられたり。木登りに恰好の木あり、おさるごっこ楽しいしげみあり。地下室にある共同洗濯場はオバケ屋敷、バラの花散る細い路地は女の子たちの「ひみつの小路」。遊具は何一つないのに、朝から晩まで子ども達の賑やかな声が絶えません。そして、私にも覚えがあるのですが、むしろのシートだの持ち出して来て、掘立小屋作り。恰好の枝ぶりの、りんごの木が数本あった



我家の裏庭は、夏の間中まるで難民部落でした。いつもはバレーボールや馬とびに興じている、中学生のお兄さんお姉さん達も、よく子ども達の仲間に入って来ました。小屋作りを手伝ってくれたり、鬼ごっこを一緒にやったり。小さい子ども達にとっては、肩車をしてもらって、その仲間に加えてもらうのが、何よりうれしいことで

した。

ある時、お兄さん達、スーパーマーケットのごみ捨場から木箱を持ち帰り、どこで見つけたか、壊れた乳母車を拾って来て車作り。その手元を期待に満ちた、真剣なまなざしで見つめる子ども達。ふと、日曜大工器用な、彼らのお父さんの姿を思い浮べたことでもあります。ここには昔懐かしい遊びがたくさん残っていました。

我家の三人は、と言えば、始めはもっぱら眺め役。終日戸口の石段に腰かけては眺めていました。もちろん、私をも含め、三人とも会話はゼロ。ABCも知らない状態でした。たまたま左隣が日本人家族で、同じ年頃のお友達があり、とてもよい通訳。彼女と遊びながら次第にみんなの中に入って行きました。もちろん自分からは何もしゃべりませんが、一緒になってかきまわっているのです。又、その頃、女の子達の間では、日本の「おちゃらか」のような遊びが

はやっていて、輪になっては歌を歌いながら手拍子を取っていました。そんな中に入って遊んでいるうちに、真由美は自然に英語を覚えて行き、夏休みの終わる頃には、彼女達としきりにおしゃべりを始めていました。

「イエス」「ノウ」「オッケー」と共に、まず出はじめたのが「ミイ」。ミイ (me) とは自分の事で「ほく」「わたし」とでも言うのでしょうか。「誰がするの」と言われて「ミイ」と言う具合。それを日本人の子どもは「ミイがする」「ミイの本」と言う風に、日本語の中に取り入れて使いました。

「ミッシー」(Let me see) — 見せて。  
「ドンプッシュ」(Don't push) — 押さないで。  
「アイウォンナプレイ」(I want to play with you) — 遊んで。  
「カムヒヤ」(come here) — おいで。  
「ゲラルヒヤ」(Get out of here) — どいてなと、まず耳につき始めました。英語との出合いが、This is a pen.

であった私は、帰国するまで言語障害に悩まされ続けました。

真由美ほどにはすぐ友達の前になかった浩史、日本語すらしゃべるに至っていないかった貴宏は、時々道行く人に「ハロー、ハロー」と声かけるくらい。(アメリカのおじいさんやおばあさんは気軽によく声をかけてくれます) 近所の男の子に話しかけられると「英語じゃわからんヨ」と照れて逃げ帰って来てしまいました。そして、日本に居た時、同じような、ちび仲間と「仮面ライダーごっこ」に夢中だった浩史、相手を失ってひとりぼっち、手持無沙汰にテレビを見る事が多くなりました。

「アメリカのテレビ、怪獣いないからつまらない。日本のテレビ持って来ればよかった」と嘆くこと、嘆くこと。これは浩史だけではありません。幼い日本男児すべての嘆きでありました。それで一生懸命マンガ番組を探しては、ポパイだのバットマン

だのトムアンドジュリーだったので、うめ合わせをしていました。こうして長い夏休みが終わる頃には、真由美はすっかり友達の中に入って行き、浩史はテレビっ子になっていました。

### 浩史、ナーサリー・スクールへ

一九七三年九月九日の朝、ぬけるような青い空、肌寒い空気が晩秋を想わせるようでした。うっそうと繁った並木道をトロトロと下ると、アパートの外れに、小さな木造の二階家があります。「コロニアアルブレイタイムハウス」。これが浩史の通うことになった幼稚園です。彼は夏休みの間に四歳になっていました。

我家の近所にはこの他にもいくつかナーサリー・スクールがありました。ナーサリー・スクールと言っても、独立した建物や庭を有する園もあれば、教会附属のもの、アパートの一室を借りているものなど形

も様々ですし、内容もいろいろでした。大抵スクール・バスがついていますから、片道一時間かかって有名校に通っている子どももたくさん居ました。まだ慣れない、事ではありましたが、歩いて五、六分、日本人も居ると言うことで、浩史はこの園に決めました。

英語が分からないからとか、お友達にいいじめられたらなど不安もありましたが、散歩の途中、柵の外から眺めていたぶんこや、砂場に寄せる期待も大きかったし、今日はお父さんも一緒に来てくれると言うので、いやがらずに出かけました。

小さなドアを開けると、まだ登園前か、静まり返った部屋の奥から、女の先生が出て来られました。入園させたい旨申し出て、手渡された用紙には、次のようなクラスがのっています。

週五日 午前と午後（オールデイ）  
週三日 " " " " " "

週二日 " " "  
週五日 午前だけ 午後だけ（ハーフデイ）  
週三日 " " "  
週二日 " " "

以上六つのクラスで、費用もそれぞれによって異なるわけです。今までこんな選択をしたことが無かったので、さてどうしたものかと思案した訳ですが、週五日の午前中に決めました。

二年後に貴宏を別のナーサリーにやった時には、隔日のハーフデイはとり止めになったとのことでしたから、どこでもこういうクラス分けをしていたと言う訳ではなさそうです。でも、どこにでも、オールデイ、ハーフデイ、隔日と言うクラスがあり、本来の理由は明らかではありませんが、親にとっては大層便利の良いものでした。高い保育料ですから半日にするとか、隔日にするとか。親の出かける曜日に合わ

せてオールデイにするとか、そして、まったく時間が取れるのは午後だから、午後のクラスの方が希望者が多いとか。年齢の小さい子どもだと、二日間のハーフェイから始めてだんだんに慣らして行くとか、いろいろな理由があったようです。

こんな手続きをしている間に、小さなスクールバスが着いて、十人程の子ども達が登園して来ました。長い夏休みを終えて、久しぶりに顔を見せたのでしょう、ひとりずつ先生からキスしてもらって入って来ました。日本人らしき子どもも三人。

子ども達は部屋に入ると、静かにテーブルに着き、作業を始めました。たくさん穴のあいた板に、小さな色棒をつきさして、いろいろな形作り。しばらくして、それが終わると今度は別のコーナーから粘土を取り出して来てねん土遊び。浩史もみんなの中に入れてもらってそろそろと手を動かし始めました。

最近の幼稚園と言えば、真由美の通った東京の幼稚園くらいですが、登園時の園と言えば、部屋の中でも外でも元氣一ぱい、賑やかな声に、はち切れんばかりだったような気がします。そんなものだと思っていました。でも、ここではみんながとても静かなのです。かけまわる子、大声を上げる子なんて、ひとりも居ません。それから後、いくつかの幼稚園や小学校で、室内では静かにするものという習慣を体験するにつれ、この静けさは当り前、驚くには当りないと言ったことが分かって来ました。この時にはびっくりしました。

この日は後からもうひとり、インド人の男の子が新入児としてやって来ました。それまで黙って粘土をいじっていた浩史、その子がお母さんに置いて行かれて泣き出すと、それにつられてしくしく。でも、そのまま園に残りました。

九月が一応新学期ではあるけれども、ナ

ーサリーは入園随時、それで九月に集中すると言う事もなさそうでした。月謝を納めるだけで、入学金もいらず、お道具類も制服も無し。着のみ着のまま、すぐその日からお預りしますと言う、実に簡単な入園でした。真由美が六月に始めて小学校に行つた日、ノート一冊に鉛筆、お弁当を持たせていましたら、事務室で手続きの後、すぐ教室につれて行かれそのまま三時の終了まで、けじめがはっきりしていると言うのか、ちょっと呆気ない感じでもありました。

落ちつかぬ午前中を過ごして、午後一時、玄関前で待っていると、数人の子どもを乗せた車が止まりました。浩史を降ろして、にこにこ先生、「よい子でしたよ」と。浩史も、今朝の泣き顔もどこへやら、早速報告です。みんなと食べたおやつも楽しかったようです。「ジュースくれたの。先生がね、英語でジュースのおかわりあげ

ましようかって言ったけど、ちょっと嫌いな味だったからもらわなかった。クッキーもくれた」

こうして楽しいナーサリー生活が始まりました。朝九時、家の前で車に乗り、一時、家の前で降ろしてもらう。隔日の子どもも居ましたから、その日によって人数もまちまちでしたが、二、三十人の子ども達だったようです。

この園では、親の参観は御遠慮願いますと言うことらしく、ついに一度も授業の様子を見る機会はありませんでした。一体何をしていたのやら、持って帰って来る作品で知るしかありませんでした。彼は大きなわら半紙に太い筆で絵を画くのが好きだったらしく、よく持ち帰りました。アルファベットのおけいこカードを作ってくることもありました。又、空缶、空びんを持って行くこともよくありました。初めのうちはそうした連絡は、送りの時直接先生が私に

伝えて下さいましたが、二か月程すると、浩史が聞いて来て、私に伝えるようになりました。「あしたレーヴェンいるみたい」とか「ブラウンバッグ持って来なさいって」と言う具合です。レーヴェンがリボンであり、ブラウンバッグがマーケットの紙袋である事など、私も彼と一緒に覚えて行くことになりました。

大体口は遅くて、あまりおしゃべりとは言えない浩史。「流れるってことはジャラジャラってなること？ こぼれること？」とか「なめるってことは、しゃぶるってことなの？」など、よく尋ねる頃でした。そして一時影をひそめていたどもりが又現われ始めていました。彼はもつと後になって、英語でしゃべるようになってから、英語でもどもつた時期があり、おもしろく思ったのですが、日本語ほどひどくはならずに治ってしまいました。

恥ずかしがり屋も手伝って、相当長い間

イエス・ノウの首ふり人形だったようです。

ある時「Beautiful」ってどう言うことかな。浩史が絵を画く時いつも先生が「Beautiful」って言うの」と話しかけて来た時、その発音の美しさに思わずうっとりしたものでした。

(つづく)

